

第III章 野営地の再構成 —考古学資料を用いた人間行動の復元—

はじめに

この小稿は、本書の第II章3「学生部体育館建設予定地の調査」の報文をもとに、特に遺跡の性格について分析しようとするものである。

一般的に遺跡は、長期間にわたって繰り返えしヒトが住み着き、したがって住居跡などの遺構が集中して発見されるため、そこで行なわれた諸活動を示す区域を明瞭に追跡すること自体困難な場合が多い。

しかし、この非常に小規模な遺跡は、縄縄文期のなかでも極めて限定された短期間に形成されたと推定されるため、空間的な諸活動が的確に復元され得ると判断したからである。ここで用いる分析の手法は、当然ながら発掘調査によって我々が得た考古学的遺構、遺物の出土・分布状況をもとにした、極めて基礎的なものである。その結果得られた、この小規模遺跡に対するかなりの確証をもった仮説は、縄縄文期の生業体系の一端を理解することができたことはもとより、ヒトの活動域が複雑に累積された様々な遺跡の仕組みの解明にも適用できるであろう。

1 遺物分布からみた“場”的性格

この遺跡から出土した遺物は、縄縄文土器6個体分、剥片石器11点、礫器14点、石製剥片・碎片620点、礫43点などである（第1表）。この項では、種類別にみた出土遺物の分布の特徴から“場”的性格付けを試みる。

個体別土器の分布にみられた特徴（pp. 38～39、第24図）は、これらの土器がいずれも使用時のままの状態

を保っていたのではなく、二次的に現位置にまで移動されたもの、つまり、それらは廃棄されたものであるという仮説が成立するだろう。

そこでまず最初に、4個体分の土器破片がまとまって検出され、器物の廃棄の主体をなすと推定された01-03 (23) グリッドを中心とする長径130cm、短径100cmの範囲内の状況をみてみよう。ここから検出された4個体分の土器の破片の在り方からみて、これらの土器は現位置に持ち込まれる以前に破損していた可能性がある。例えば、個体番号4にみられる主として2箇所の破片のまとまりなどは廃棄後に起きたというよりは、持ち込み方のあらわれ、とみた方が合理的である。つまり、煮沸に用いられていたこの土器は、破損後主として胴部下半までを境として2つの部分が別途に、恐らく直接的にこの廃棄場にまで持ち込まれたものと推定されるからである。しかも、ここでみられた2つの部分のまとまり方は、この土器の使用時での破損が、胴部下半あたりにまず生じた可能性をも示している。その一方で、この個体の残り5点の破片は、二次的に個体番号2など別個体の土器破片とともに廃棄された状況を示している（第6表、第24図）。同じようなことは、個体番号3の注口土器にも言えるであろう。

この2個体の土器にみられた破片の在り方は、他の4個体の土器でもとりわけ個体番号5、6とは著しい相違を示している。それが何に起因するのかは推測の域を出ないが、この遺跡の場合、恐らく土器の使用、廃棄に時間差があったのではないか、と考えられる。つまり、少なくとも破片にまとまりのみられる土器の方が、散在し

ているものより廃棄が新しい場合がある、という解釈である。

また、大筋として上のような解釈が成立したとしても、新しい段階での廃棄とみられた土器破片と、古い土器破片とで複数のまとまりを形成する状況をどのように考えたらよいだろうか。仮りに、この遺跡における土器破片の廃棄単位の最大規模を、01-03 (22) グリッドでみられた個体番号4の口縁部から胴部までの破片のまとまりに求め、長径60cm、短径40cmの範囲をそれと仮定したとしよう。そして、その範囲を基準としてこの遺跡における土器破片のまとまりを求めるとき、平面的には10箇所を上回る集中箇所（“ブロック”）を抽出することが可能である（第23図）。つぎに、このようにして抽出された“ブロック”をみると、その大部分が、2～4個体の異なった土器破片によって構成されている（第6表）わけである。これに対しては、もっとも新しい土器の廃棄の過程で古い土器破片が混入した、と解釈するのが妥当であろう。つまり、より古い過程での廃棄漏れのほかに廃棄の場が複数にわたっていた可能性が考えられるわけである。それはまた、個々の土器の破片が完全に揃わなかったり、帰属不明の土器破片が存在している（第1表）ことからも裏付けられる。これらの土器破片は、この地点以外の地域に集積ないし廃棄されていると考えた方が理解し易いからである。

土器破片の廃棄は、以上のような場のほかに、非常に少量ではあるが炉跡にもみられた（第6表、第24図）。その伴出関係は、少なくともそれぞれの炉の廃絶以後に、そこが土器破片など廃棄場として利用されたということを示しており、従って、そこにみられた大半の土器と炉の使用時期とがほぼ一致するとみなすこともできるだろう。

石質別にみた剝片石器、剝片・碎片の分布（P. 39）

から、つぎのような特徴を読み取ることができる。

- ① 分布の主体は、三箇所の焼土上にみられる。
- ② 「黒曜石1」や粘板岩のように、分布の集中箇所を抽出することができるものと、「黒曜石2」や瑪瑙のようにそれができないものとがみられた。
- ③ 全体の分布状況は、「黒曜石1」にみられた3群によって代表される。北側から順に「集中箇所1」、「集中箇所2」、「集中箇所3」とよぶ（第25図）。

「集中箇所1」は、「黒曜石1」のほか粘板岩の集中箇所とも重複し、長径2m、短径1.7mのほぼ円形の範囲内を言う。「集中箇所2」は、「黒曜石1」を主体とし、長径1.5m、短径1mの不整形の範囲内を言う。「集中箇所3」は、「黒曜石1」を主体とし、0.8m×0.8mの不整形の範囲内を言う。さらに、いずれの集中箇所とも少量の「黒曜石2」や瑪瑙を混在し、また、スクリーパーが含まれている。

さて、以上のような剝片石器、剝片・碎片の在り方に對してどのような性格付けができるだろうか。

まず、各々の集中箇所は石器の使用や製作時のままの状態を保っているのではなく、それから二次的に現位置にまで移動、廃棄されたもの、という仮説が成立するだろう。焼土に重複してみられた3つの集中箇所は、恐らくそれぞれの炉の廃棄直後にそこが廃棄場として利用されたものとみられる。ということは、これらの石器や石器製作とそれぞれの炉の使用時期はほぼ一致すると考えるのが妥当であろう。

3つの集中箇所とも主体を占めるのは「黒曜石1」であり、そのうち1箇所（「集中箇所1」）で粘板岩の集中的な廃棄と重複していた。また、いずれの集中箇所にも少量の粘板岩（ただし、この場合は「集中箇所2・3」のものだけを言う）、「黒曜石2」、瑪瑙、さらには土器破片の混在している様子を伺うことができた。これは「黒曜石1」に混入し廃棄されたもので、同時に、剝片

石器、剝片・碎片の廃棄が土器破片の廃棄と併行して行なわれたことも示している。

つぎに、石斧や礫器・礫の分布にみられた特徴（p. 42）は、どのように整理されるだろうか。

まず、石斧は、大部分の礫器・礫と同様使用後に直接ないし、間接的に現位置に廃棄されたものと推定される。

礫器・礫のまとまりのうち、「集中箇所2」はその中に礫番号6 a, bなど「炉石1」、「炉石2」あるいはその双方から直接ないし、間接的に廃棄されたと推定されるものを含んでいた。また、特にまとまりを示さないが「炉3」から廃棄されたと推定される礫もみられたので、これらの石囲い炉は、その不完全な形態からも伺われるよう、すでに解体されて原型を保っておらず本来の機能を失った状態を示すもの、と推定される。

「炉石1」や「炉石2」と関連するもう1つの「集中箇所1」は、恐らくそこで石割りなどが行われた、いわば工作場と推定される性格を強く示している。この場で割り取られた礫は、直接的あるいは間接的に「炉石1」や「炉石2」に持ち込まれ使用されたと推定される。

以上の分析をもとに、場の性格や形成過程などについて要約するとつぎのようになるだろう。

① 石囲い炉など火を伴う作業場、炉石に使用する礫の割り取りなどを行った工作場、そして廃棄場という3つの性格付けができる場が確認できた。

② 少なくとも三箇所の炉が石囲い炉であると推定されたが、いずれもすでに解体され原型をなしていなかった。そのうち、「炉石1」と「炉石2」の2つの石囲い炉へは、一箇所でみつかった礫の割り取り場（「集中箇所1」）から割り石が持ち込まれ、炉が作られたと推定された。この炉については、礫の割り取り場は共通するものの、炉石の廃棄場、つまり「集中箇所2」がどのように形成されたのかによって、それらの製作、使用、廃

棄に至る経過が異なってくる。そこで、礫の接合（第26図）をもとに、炉石の廃棄に至るまでの経過を示せば、主としてつぎの9通りが想定される。

- a 「集中箇所1」→「炉石1」・「炉石2」→「集中箇所2」
 - b 「集中箇所1」→「炉石1」→「炉石2」→「集中箇所2」 「集中箇所1」↑
 - c 「野中箇所1」→「炉石1」→廃棄（「集中箇所2」など） ↴「炉石2」→「集中箇所2」
↑「集中箇所1」
 - d 「集中箇所1」→「炉石1」→「集中箇所2」→「炉石2」→廃棄
↑「集中箇所1」
 - e 「集中箇所1」→「炉石1」→廃棄→「炉石2」
→「集中箇所2」 「集中箇所1」↑
 - f 「集中箇所1」→「炉石2」→「炉石1」→「集中箇所2」 「集中箇所1」↑
 - g 「集中箇所1」→「炉石2」→廃棄（「集中箇所2」など）
↑「炉石1」→「集中箇所2」
↑「集中箇所1」↑
 - h 「集中箇所1」→「炉石2」→「集中箇所2」→「炉石1」→廃棄
↑「集中箇所1」↑
 - i 「集中箇所1」→「炉石2」→廃棄→「炉石1」
→「集中箇所2」 「集中箇所1」↑
- さて、以上のうちどの経過がもっとも可能性があるだろうか。まず、一般的に古い炉ほど原型を留めていない、つまり礫が抜き取られているという判断に立つなら「炉石2」の廃絶が「炉石1」より古いと仮定することができよう。とすると、可能性として残されるのはf～iの4つの場合である。しかし、この中からどれか1つを特定することは難しいから、ここではそれらの経過をおお

まかに比較しながら検討し、可能性を探ってみよう。

まず、「集中箇所 1」で割り取られた礫が「炉石 2」へと持ち込まれ石囲い炉が作られる、という経過はいずれからも伺うことができる。その経過に違いが生じるのは、「炉石 2」から「炉石 1」へと礫が再利用される過程で、それが直接的 (f, g) になされたのか間接的 (h, i) になされたのかという点である。仮りに前者だとしたら、この遺跡の石囲い炉で完全を形状を保っていたものがみられないで、炉の廃絶は礫の廃棄をも伴うものと推定されるから、礫の廃棄の場が「集中箇所 2」を含むかどうかは別としても、g に示したような経過が想定される。それはまた、「炉石 1」の礫の廃棄場の 1 つとして「集中箇所 2」が極めて近い位置を占めている点からも言えることである。これと同じ見方を後者に適用すれば、i に示したような経過が想定されるだろう。

つまり、g, i いずれかの経過をみても、「炉石 2」から「炉石 1」への礫の再利用が直接なされたか否かにかかわらず、炉石の廃棄を伴って行なわれたこと、そして「炉石 1」の廃絶などに伴う炉石の廃棄場は「集中箇所 2」にも求められることが推定される。

一方、「炉石 3」については、「炉石 1」や「炉石 2」の礫の割り取り場に相当する「集中箇所 1」のような場が特定できなかったが、この炉から直接あるいは間接に廃棄されたと推定される礫が、比較的近い位置 (00-04 [21・31] グリッド) とかなり離れた位置 (01-04 [33], 02-04 [03] グリッド) で「散在していたもの」の中から検出された。

ここで、この遺跡から発見された炉の変遷をみると、つぎのようになるだろう。

まず、炉の切り合いから、「焼土1-D」→「焼土1-E」(「炉石 2」) という先後関係が成立する (→第Ⅱ章-3-1, p. 25)。 「炉石 2」と「炉石 1」の先後関係は上で検討したように、「炉石 2」が「炉石 1」より古いと

想定された。このような炉の先後関係は、この遺跡の炉が単設で使用・変遷したことを示している。したがって、「焼土 2」(「炉石 3」) は、「焼土1-D」にもっとも近い残存状況を示していたから上にみた炉の変遷過程に組み込むことは難しく、この遺跡で検出された炉の中ではもっとも初期の炉と推定される。これを整理すると、炉の変遷は、

「焼土 2」(「炉石 3」) → 「焼土1-D」 → 「焼土1-E」(「炉石 2」) → 「焼土1-A」(「炉石 1」)となるだろう。

以上の検討を通じ、この遺跡から検出された掘り込みを伴う 4 基の炉の基本的な構造は、石囲い炉であったと推定された。そして、これらの石囲い炉の礫は、新たに供給されるものと共に、古い炉の礫を再利用するという特徴を読み取ることができた。

③ 「集中箇所 3」と 5 本の石斧も含めた礫の「散在していたもの」の廃棄は、どのように考えられるだろうか。まず、「散在していたもの」の中には、先にもふれたが「炉石 3」から廃棄されたとみられる礫が確認された(礫番号 1)。そのうち、かなり離れた位置 (01-04 [33], 02-04 [03] グリッド) に散在していた礫の比較的近くに「斧 1」が、また同様に、「集中箇所 2」の中には「斧 2」が含まれている。この 2 本の石斧が後から二次的に混入したものでないとしたら、先に示した炉の変遷からみて「斧 1」の廃棄が「斧 2」より先行したであろうと推定される。

しかし、残り 3 本の石斧や「礫集中箇所 3」など多くの礫の廃棄が、どの炉と対応するのか直接確かめられてはいない。そのうち何点かの帰属は、恐らくそれらと共に伴関係にある他の遺物の動向から得られるであろう。

2 遺跡の構成と変遷

この遺跡から発見された 8 箇所の焼土と土器破片や石器類、礫などの遺物の分布・出土状況などを分析した結

果、ここに当時の人々が残した活動域は、主として2つの異なる性格を持つもので、それらが複合して機能していた様子を知ることができる。

まず、この小遺跡で主要な活動域の遺構は、掘り込みを持ち、よく焼けた4箇所の炉である。これらの基本的な構造は石囲い炉で、それぞれが単設で使用されていたと推定された。炉の周りには、住居の構造などを示すような掘り方や踏み固められてよく締まった床面、柱穴などの遺構は検出されていないので、これらの炉が住居に付設されていたと断定することはできないが、1つの炉を中心にテント状などの極めて簡易な構造物があった可能性は否定できない。

さらに、これらの炉は「焼土2」がもっとも古く、「焼土1-A」がもっとも新しいと推定されたので、主要な活動域の占地が、川に比較的近い場所から少しづつ離れた位置へと移動、変遷したことを伺わせる。

このほかに、炉石などの礫を割り取った、いわば「石割り場」と特定できた区域が少なくとも1箇所存在した（礫「集中箇所1」）。そこで準備された炉石は、古い時期の炉石の再利用を伴って、少なくとも「焼土1-A」（「炉石1」）や「焼土1-E」（「炉石2」）に供給されていたことが突き止められた。

以上のような主要活動域とは異なる性格を持つ場には、器物などを廃棄した区域がみられた。廃棄場は、一部分で主要活動域と重複するものの、大部分がそれと隣接した区域で取り囲むように形成されており、なかでも東側に広がりをもっていた。

このうち、炉跡には少量の土器破片や礫などを混在するものの、黒曜石製石器、剝片・碎片が非常に高い密度で出土している。これは、恐らく炉の廃絶に伴ってこれらの器物類が廃棄されたものと推定された。したがって、そこに廃棄されていた器物は、その炉より古い時期に使用されたものも含まれているだろうが、大部分はその炉

の使用とほぼ同じ時期と推定される。

次に、炉跡が黒曜石製石器、剝片・碎片類の主要な廃棄場であったのと違って、それと隣接した区域は土器や礫など他の器物の廃棄場として利用されていた。特に、その中でも東側の広場には、土器の一括破片や礫器をまとめて廃棄したと推定される区域が設けられていた。これらの器物の廃棄は、先に示したような炉の廃絶とほぼ対応しており（第6表）、この場で1つの炉を中心として主要な活動が行われ、それがほぼ終了するのに伴って器物が廃棄された、ということを伺うことができる。このように、炉に隣接した区域が土器や礫などの主要な廃棄場として繰り返し利用された結果、それらが他の区域よりも著しく高い密度で出土した、という背景を読み取ることができよう。

以上のような活動域の復元を通じ、この遺跡を残した人々の活動の様子がどのようなものであったか推定してみよう。炉を中心とする主要な活動域は、その規模や出土遺物の量などからみて、ここが多人数の集団によって長い期間利用された生活の拠点的な場ではなく、小人数（恐らく5人前後の集団）によって極めて短い期間、しかも限定された期間だけ利用された野営地であったと考えられよう。時期や季節を決める証拠に乏しいが、炉の中から出土した極めて少量の植物種子、例えばヤマブドウはこの野営地が利用された季節を示していると言えよう。ただ、この野営地が1年のうち秋季に少なくとも4回程度利用されたのか、あるいは秋季利用が少なくとも4回程度に及んだのか、全く確証がない。

いずれにしても、この遺跡はその利用が秋季に亘る季節的な野営跡であり、広く豊平川流域に生活していた縄文期の人々が、特定の生業活動を行っていた場所、と言えよう。しかし、彼らがこの野営地で行った生業活動の主体は、ついに明らかにできなかった。こ

こに最初に野営した小集団の所持品で我々の目に止まつたものは、1～2個の煮沸用容器のほかに1～2本の磨製石斧、2～3本のスクレイパー、一握りの黒曜石や瑪瑙などで、それらは極めて簡素な内容であった。このような廃棄された器物の中から、少なくとも彼らがこの野営地で行った主要な生産活動を読み取れるような道具類は見い出せない。ただ、その場所が小河川沿いであることなどからみて、恐らくサケ科魚類の捕獲も対象とした野営地であったと考えるのが妥当であろう。

それよりもむしろ、発掘調査によってわれわれがほぼ明らかにし得たのは、野営地でのすがし方の、しかもその一断面であった。彼らは、川に面した平坦な場所を選び、持ち運んできた数個の礫を割り取って小さな石囲いの炉を作り、恐らくその上をテント状の簡易な小屋掛けで覆

い、ここでの諸活動の拠点としたであろう。

短い生業活動の間に排出された廃棄物は、野営地を撤収する際にまとめて処理された。破損した煮沸用容器や抜き取られた炉石などは、主に諸活動の拠点としていた場所に隣接した東側や南側の広場に廃棄された。また、廃品となった剝片石器や石器加工での不要な石くずは、まとめて炉の中に捨てられた。

ここに最初に野営した小集団によって作られた、このような諸活動の拠点の場と廃棄場は、その後この地点を、少なくとも3回に亘って利用した小集団にほとんどそのまま受け継がれこととなる。つまり、この小規模な野営地にみられた漁撈採集民の行動パターンは、この野営地が同一集団によって、しかも継続的に利用されたことを物語っているだろう。

(横山英介)